
眞実

桜井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眞実

【著者名】

N4239G

【作者名】

桜井葵

【あらすじ】

死んだと思われていた知夏はどうしたのか？その真実が今、明らかに。回復の道のりと綾に会うまでの道のりは楽なものではなかつた。

俺は今、暗闇の中に一人でいる。

どこだかわからない。

自分が誰だかわからない。

たった一つわかっていることは、『大切な人が傍に居ない』ってこと。

すごく不安だ。

「…………ううだよ……お」

時々聞こえる優しい声。

すぐに分かった。

この声が、この声こそが俺の求めているものだと。

でも…

姿が見えない。

会うことができない。

『会いたい。』

自分が誰だかわからなくてもいい。

彼女に会えるのなら…

そして、あの時、奇跡が起きた。

「知夏、あと少しだから待つてね」

彼女はそういった。

そして、彼女の目からは大粒の涙が落ちた。

はっきりと映像が映し出された。

光なんてひとつもない、暗闇に彼女の涙が光っていた。

「綾・・・。」

自然と言葉が漏れた。

俺の名前は、知夏。そして、彼女の名前は、綾。

彼女の涙が落ちた所から光が溢れていく。

やがて俺は光に包まれている状態になった。

そして、視界がハツキリとする。

目覚めたところは病室だった。

どうやら俺は長い間、意識不明だつたらみたいだ。

目覚めて初めて出た言葉が…

『綾

だつた。

周りにいたすべての人気が驚いた。

それは仕方ないだろ？。

だって、
長い間意識不明だった男がいきなり起きて、「綾」と言つたのだから…

俺は、最愛の女を助けたあと、男に刺された。

それで、俺は最愛の女に病院に運ばれた。

でも、その病院は市でも有名な歎医者だった。
脈が弱くなつた時点で死んだと告げた。

そのことで最愛の女…綾を傷つけてしまつた。

俺の脈が少し強くなつたとき、俺が生きているということに子分
がきずいた。

それで、違う病院に移された。

そして、俺は…

今、目覚めた。

「特に異常はありません。」

そう、担当の医者が言った。

異常はない。といつても、長い間植物人間だったわけだから…入院はしなくてはいけない。

結局、一週間の入院が決まってしまった。

最低、一週間は「綾」に会えない…。

会いたい。

自分のせいで彼女が苦しんでいると想つと…胸が苦しくなったまらない。

「退院おめでとうござります。」
担当の看護士が挨拶をしていた。

「はあ、ありがとうございます……」
そう言って、病院を出た。

久しぶりに見る景色はすぐ懐かしかった。

『綾・・・』

とりあえず、学校に向かつた。

「おうーー久しぶりだなーーー綾は?」

聞いた生徒は、俺を化け物でも見るような目で見ていた。
それも仕方ないだろう……俺は死んだ人物だから。

「あつ、それが……行方不明なんですよ……。」
そう言って、すぐに消えた。

『は?なんで、行方不明って何?』

俺はとても大きな不安を覚えた。

「え？ 七瀬さんですか？ 知っていますよ、『わせですか』……」

「の言葉で俺は飛び出した。

無我夢中だった。

そして・・・・・

彼女の高校に編入する」とこした。
もちろん、同じクラスに…。

「今日は転校生が来ている。入って下さい…。」

そういうて、担任の先生は俺を教室に入れる。

『いた。』

思わず笑みが零れる。

その瞬間周りの邪魔な奴らが騒ぎ出した。

『「ひるねこ……』』

そう思いながら、綾を見るとやはり頬が緩んでしまう。

それきまで寝ていた綾がいきなり立つ。

彼女の目には涙が浮かんでいた。

「ち・・・・な・・・つ」

最後は聞こえないほど小さな声だった。

「あせ……」

どんなにこの時を願つたか。

どんなにお前に会いたかったか。

綾はゆりくつと並びこへる。

真っ白に透き通つた肌。
くつくつとした大きい目。

小さめの口。

肩ぐらこの長さの明るい茶色の髪。
すらりと伸びた長い手足。

俺は昔と変わらない笑顔で、

「あや。」

といった。

「知夏！！」

綾は、俺に抱きついてきた。

久しぶりに感じる綾の体：

やわらかい肌、
髪の毛の甘い香り、
暖かい体温。

俺は綾の体温を感じていた。

そして、俺は綾が泣いているのを優しく見守っていた。

「綾、待たせたな。」

俺はそういった。

昔と変わらない笑顔で、

微笑んだ。

俺はお前を愛してる。

(後書き)

連載中の「永遠に」の番外編、短編小説です。

そちらの方も読んで下さい。

感想、評価よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4239g/>

真実

2010年12月26日14時27分発行